

現代語訳を活用した『古事記』の指導(国語総合)

〳〳ヤマタノヲロチの指導を例に〳〳

東京都立日比谷高等学校 保戸塚 朗
<http://members.jcom.home.ne.jp/dec.family/>

〈レジュメ構成〉

- 1 この発表の見取り図
- 2 研究授業を通して考えたこと
- 3 平成十五年度「まなび」(中堅校部会・古典) 研究授業用指導案
- 4 資料

1 この発表の見取り図

〈1 問題意識〉

【A 時間減の中の国語科指導】

- (1) 時間減(小・中学校+高校)という現実の中で、どう力を養うのか。
↓①国語科としての明確な「指導目標」を持ち、
②それを生かす「年間」指導計画を立て、
③それを生かす「教材」を厳選する。

(2) 少ない時間の中で、スピード感のある指導、さまざまな要素(「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」など)がミックスされた指導を工夫したい。

【B 古典を読む力】

- (1) 時間減という現実の中で、指導の基本に立ち帰ることが重要である。
↓古典の指導の基本とは、「古典に親しむ態度」を養うことである。
- (2) 同時に、「古典を読む力」を養いたい。
- (3) さまざまな指導を工夫することで、広がりのある古典の指導を目指したい。

【C 現代語訳の活用】

- (1) 時間減 + 多くの教材 ↓ 現代語訳の計画的な活用。
- (2) 現代語訳の捉え方(どんな現代語訳を、どのように編集し、いつ、どのように与えるか、など)

【D 古事記の教材性】

- (1) 古事記のおもしろさ。
- (2) 教室で扱う際の注意点。

〈参考〉「まなび」

*東京都教育庁指導部及び東京都教職員研修センターが平成十五年度から開始した事業で、授業改善や授業研究のみに特化した、教員の実践的な教科指導力の向上を図る主体的な研究組織。平成十五年度には「進学指導重点校部会」「中堅校部会」「基礎学力充実校部会」「定時制通信制部会」「中高一貫教育校部会」があり、それぞれ科目ごとに研修を進めた。

〈2 発表の内容〉

- (1) 「まなび」 研究授業の内容
- (2) 研究授業を通して考えたこと
 - ・ 現代語訳の活用
 - ・ 古事記の教材性

2 研究授業を通して考えたこと

●「まなび」の研究授業

「まなび」での私の問題意識は、国語総合において、「時間減という現実の中で」「古典を読む力」を効果的に養うためにはどうしたらよいのか？ ということであった。同時に、当時の勤務校がいわゆる基礎学力充実校であったために、指導の目標とすべき「古典を読む力」をどう考えるべきかについても考えの一端を示してみたのである。(6～8頁参照。ただし、「古典を読む力」をどう捉えるかについては、さらに考察をしなければならぬ点が多々ある。例えば、「関心・意欲」といった点をどう盛り込むかは重要な視点であろう。)

さて、以上の問題意識に対する一つの具体的な指導として、「現代語訳を活用した古事記の指導」を提案した。提案の理由は、

- ① 現代語訳を活用することで、スピーディな授業展開ができる。(↓時間減の中で「読むこと」の量を確保したい。)
- ② その中で、話の内容を捉える、イラストを書く(読解を深める)、話の内容を抽象化してまとめる、原文を暗誦する、といったさまざまな学習活動が組織できる。(↓生徒の主体的な学習(言語)活動を授業の中心に据えたい。)
- ③ 原文を音読して味わうという(勤務校の実態に即した)力を養うことができる。(↓「古典を読む力」を養いたい。)

であった。

しかし、実をいえば、この提案の根本にあったのは、三浦佑之『口語訳古事記(完全版)』(文藝春秋、二〇〇二)がおもしろいということであった。古老の語り口を持ち、脚注にも知的好奇心を刺激する内容を満載するこの「現代語訳」を、何とかして教材化できないかと考えたことが、すべての始まりである。その『口語訳古事記(完全版)』を教材化する中で工夫したことは、

- ① (現代語訳であることを活用して) 神話の背景にある思想を読み解くことで、古典の奥深さに触れさせる。
- ② 複数の教材を組み合わせることで、ある程度の分量をこなすとともに、それぞれの教材の響き合いによって、理解の深まりを目指す。

ということであった。

研究授業の後の検討会では、概ね指導の意図は達成できていたのではないかという評価をいただけた。教材として用いた三浦訳に対する共感の意見も多く寄せられた。ただし、生徒の状況によっては、この現代語訳だと用語に難しい部分があるのではないか、また、もう少し短縮化した教材化も必要ではないかといった意見も交換され、生徒に与える「テキスト」の重要性が確認された。

授業のまとめの段階に原文の音読を位置づけたが、内容の理解を先に持ってきているので、短い時間の割には予想以上に上手に読めるようになった。音読の重要性、さらに、教員による魅力的な範読の重要性といったことについても、確認しあうことができた。

●現代語訳の考え方

齋藤兆史・野崎歓『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』(東大出版会、二〇〇四)という本の中に、次のような一節がある。

野崎

柴田さんの「賞味期限」の説についてはちょっと反論したいところもある。柴田さんは原作というのはエバグリーンとはいわないけど、不変のアイデンティティを持っている、翻訳ははるかに賞味期限が短くて、新しく訳し直す必要があるというふうにおっしゃるわけだけど、でも『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の場合、原作の文章だってある意味賞味期限が来ていると思うんです。

ステイヴン・スナイダーさんという日本文学の翻訳家がいるんだけど、彼に原文はどうな
んですかと聞いたら、「いまのアメリカ人にとっては、あれは古い文体ですよ」とおっしゃっ
ていた。それは当然だと思う。ティーンエイジャーの話し方ほどあつというまに古びるもの
はないのだから。逆に、絶えずフレッシュであることが可能だというのは翻訳の強味だとも考
えられる。ゲーテの詩には、翻訳されたことで枯れかかっていた自分の詩がみずみずしく蘇った
という喜びをうたった詩があります。

日本には『ハムレット』の訳が四十もある、おれたちは一種類しか読めないんだとイギリス
人がうらやんだという話もあるけれど、たしかにそれは翻訳文化の豊かさでしょう。だから、
ベンヤミンではないけれど、翻訳は原作ののちの人生、原作の未来なわけですよ。その新し
い生命をつくり出せるというのは幸せだと思っし、またそういうかたちで原作が生き延びた状
態に出会える翻訳の読者というのもやっぱり幸せじゃないですか。

齋藤 うん。しかも、翻訳によってどこが違うのかというのを見ることで、原作がさらによ
く分かるわけですよ。だから、それぞれの研究論文として見てもいくらいのもので、いろ
んな時代にいろんな翻訳があるのを通して見ることで、さらに原作が深く読めるという意味合
いもある。

これは、古典作品と現代語訳との関係として捉えることも可能だと思う。

古典の授業として、古典作品の原文を読む力を養うことは、情報化が進み、古典作品の原文へのア
クセスがますます容易になりつつある現在、やはり重要な視点である。目の前の生徒たちの状況を踏
まえながら、原文に触れさせる指導が古典指導の基本であることを確認したい。

同時に、その原文に至る指導の過程で、どのように現代語訳を活用するのかといった視点からの研
究も、さらに続けられるべきである。「まなび」研究授業後の検討会では、

「入門期以外に、どのように現代語訳を使っているのか分からなかった」

「こんなに多くの（というか、教材すべての）現代語訳を与えているのか自信がなかった」

という意見も出された。総合国語の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の時代から、現代語訳の活用が工夫され続
けているが、実際に現代語訳を使う場面では、まだまだ有効な見通しを持ってないでいる教員も多いの
かも知れない。

現代語訳を活用するにあたっては、その前提として、

- ① 年間どのくらいの時間を配当するのか。
↓年間学習指導計画の中で位置づける。
- ② 現代語訳を活用するのにどの教材がふさわしいのか。
↓年間学習指導計画の中で位置づける。
- ③ 単元の中でどの程度の比重で用いるのか。
↓年間学習指導計画の中で位置づける。
- ④ 現代語訳をいつ示すのか【導入】で、【展開】で、【まとめ】で、宿題として、など。
↓各教材ごとの指導案で位置づける。
- ⑤ 全体の訳なのか部分訳なのか（地の文は現代語訳＋会話文は原文で、など）。
↓各教材ごとの指導案で位置づける。
- ⑥ どの訳を示すのか（学者の訳、作家の訳、教員や生徒の訳、マンガ訳、英訳、など）。
↓指導目標との連携によって工夫する。
- ⑦ 複数の訳を組み合わせる指導はどうか（解釈の比較、など）。
↓指導目標との連携によって工夫する。
- ⑧ 関連教材の現代語訳はどうか。
↓指導目標との連携によって工夫する。
- ⑨ 鑑賞文などの活用はどうか（和歌教材で現代語訳ではなく鑑賞文を活用する、など）。
↓指導目標との連携によって工夫する。

といった観点からの計画が必要になろう。

さて、現代語訳の活用が想定される場合をいくつか挙げると、例えば、

(1) 「国語総合」の入門期に、説話教材で仮名遣いについて学ぶということであれば、原文を何度も音読することに時間をかけるべきであり、内容については、すべて現代語訳で与える方がよいだろう。(現在の国語総合の教科書はそうなっている)

(2) 同じく入門期に、『竹取物語』で、辞書の引き方を練習しながら、かぐや姫が普通の人間とは異なっている点を考えるというのであれば、辞書で引かせたい語の訳の部分を空欄にした現代語訳を使って、かぐや姫の描かれ方の分析に重点を置きながら、辞書の学習も展開するということが考えられる。

(3) 入門期に、『今昔物語集』の「馬盗人」を使い、現代とは異なる武士たちの生き方に触れさせることで、古典の世界に対する興味・関心を喚起する授業を計画するのであれば、例えば、福永武彦訳を使うことが考えられる。逐語的であるよりも、読みやすさや臨場感といった要素を優先した方が効果的であると判断されるからである。長めの作品であり、すべて原文で扱う必要はない。音読も採り入れるなら、会話部分のみ原文を利用するといった方法も考えられるだろう。

(4) 古典に慣れてきた時期に、『徒然草』のある章段の版本の挿し絵を使って、話の内容とそこから得られる教訓を想像してみるといふ授業を展開するのであれば、想像した結果について意見を交換しあった後、その章段の現代語訳を示して内容をつかみ、音読をして授業をまとめるということになるだろう。最後に原文の読解を逐語的に進めるようでは、挿し絵に親しんでいた生徒たちのリズムが狂ってしまうに違いない。

(5) 二年次の「古典」で、『大鏡』の「花山院の出家」を扱い、内容と共に助動詞「つ」と「ぬ」の用法の違いを考えると、この場合でも、まずは現代語訳を利用して実質は「つ」も「ぬ」も現代語訳では「タ」となっているということを学習のきっかけにすることが可能である。その上で現代語訳で内容を理解させ、同じ「タ」という訳でありながら、「つ」と「ぬ」に込められた思いが違ふことに気づかせることができれば、『大鏡』の持つ批判意識を、文法(表現)と印象的に結びつけることができるであろう。(原文の終助詞と、その部分の現代語訳を比較するということも可能である。)

(6) 三年次の「古典講読」で、『源氏物語』「桐壺」巻の更衣の死の場面を扱って、『源氏物語』の人間像に迫るといふ授業を構想するのであれば、その場面までの内容を、円地文子訳(あるいは「あさきゆめみし」など)で読ませることが当然考えられるだろう。

といった事例が思いつく。「国語総合」か「古典」か「古典講読」かということでも違ってくるが、「古典に親しませる」という視点とともに、「時間減の中で多読を目指す」、「古文を読み解く力を養う」という面からも、指導目標を明確にしながら、現代語訳の活用を積極的に考えたい。

なお、何を「よい現代語訳」と考えるのかという点だが、それは指導目標にもなつて変化することになる。古典学習の場面では、基本的には正確な逐語訳、例えば新編全集などの学者の訳が「よい訳」ということになるが、表現学習とからめるなら、例えば橋本治『窯変源氏物語』(全十四巻、中央公論社、一九九一〜九三、現在は中公文庫)を「よい訳」と認定する場合もあるということである。現代語訳というものを固定的に捉えず、広がりのある指導を目指したい。

●古事記と現代語訳

「原文で読む」とはいつても、当然のことながら校訂本文を使っているわけだから、そこに校訂者の読みが入り込んでいるのは当然である。特に古事記の場合は、もともとは漢文体で書かれているであり、いわゆる「原文で読む」という「原文」が、既に「原文」とはいえない状況である。その意味では、かなり大雑把な言い方にはなるが、古事記の場合、「原文」も「現代語訳」も大差ないといえるのである。(三浦佑之先生は、原漢文十現代語訳のプリントで講義をなさっている由)

これを古典学習の面から考えみると、「内容の理解」ということに関しては、「古事記」ではあまり「原文」にこだわる必要はないといえそうである。

一方、その文体は、もともと語りの要素を色濃く残すものであり、「故」「しかくして」などの繰り返しによる美しいリズム感には捨てがたいものがある。もちろん、これも校訂者によって異なるものではあるが、古代の思想を支える古典のリズムとして、授業の中に位置づけたい。

●古事記の教材性と政治性

古事記の教材性については、8～9頁を参照。

古事記を扱う際に問題となるのは、やはり古事記の政治性という問題であろう。いくら「この授業は政治性とは無縁である。『古事記』のおもしろさに注目し、そのおもしろさを伝えようとしているのだから」と主張したとしても、例えば、話題となつて歴史教科書の著作者たちが、「政治性とは無縁である。歴史のおもしろさを伝えたいだけだ。」と主張するかも知れないからである。

『古事記』を扱うにあたっては、指導者は『古事記』が政治性を持って利用されてきたことに対して意識的であればならぬだろうし、自分の指導における政治性に対しても敏感でなければならぬだろう。しかし、具体的にどう政治性を克服するのかというのは、難しい問題である。

神話として表現された古代の人々の思想、例えば、「人の寿命の起源」、「自然の脅威に対して知恵で挑むこと」などを読み取ることに重点を置いて指導を展開したいというのが、今回の研究授業の提案であった。ただ、生徒がまとめたものの中には、

「・天皇が民を支配する根拠づけ。天皇の知恵と力を表している。」(都立H高等学校)

というものがあつた。おそらく、今までに学習した日本史や文学史の知識を踏まえてまとめたのであろうし、「支配する」という部分にどのようなニュアンスを込めたのかは分からないが、授業者の意図とは異なる読みであつたことは確かである。

都立H高校での実践は、たまたま査前に余裕があつたクラスで行つたものであるため、充分な事後の指導を行っていない。実際の授業であれば、生徒のまとめた読みをプリント化して配付し、いくつかの代表的な例を紹介する中で鑑賞を深めるといった展開を行うことになる。そして、その過程で、この例のような読みも採り上げながら、読みの広がりを保証はしつつも、授業者としての指導の意図を伝えることになる。

結局、政治性の問題に対しては、どのような学習活動を行い、その中で生徒たちが何を学んだのかということと答えてゆくしかない。学習活動のまとめの段階で、生徒たちの感想や自己評価に注目し、自分の目指した実践ができたのかどうか、その都度検証することが求められるのである。

●主な参考文献

- 『古事記』の本文Ⅱ新編全集、古典集成、講談社学術文庫など。
- 『古事記注釈』全四巻(西郷信綱、平凡社、一九七五～八九) *ちくま学芸文庫より刊行中
- 『口語訳 古事記(完全版)』(三浦佑之、文藝春秋、二〇〇二)
- 『古事記講義』(三浦佑之、文藝春秋、二〇〇三)
- 『古事記の世界』(西郷信綱、岩波新書、一九六七)
- 『らくらく読める古事記』(島崎晋、廣済堂出版、二〇〇三)
- 『楽しい古事記』(阿刀田高、角川文庫、二〇〇三)
- 『カイエ・ソバージュI 人類最古の哲学』(中沢新一、講談社、二〇〇二)
- ホームページ「神話と昔話 三浦佑之の宣伝板」(<http://homepage1.nifty.com/muras-tiger/>)

3 平成十五年度「まなび」研究授業用 指導案

授業研究ネットワークまなび 中堅校部会（古典） 第六回研修会 （平成15年11月21日）

『古事記』ヤマトノヲロチの指導案

東京都立桐ヶ丘高等学校 保戸塚 朗

●古典を読む力

古典の授業で大切なことは、「古典を読む力を養う」ということである。なぜなら、古典を読むことで初めて「古典に親しむ態度」が養えるからである。現代語訳の活用やマンガの活用、調べ学習といった学習材や指導法の工夫も、結局は「古典を読む力を養う」ためのものなのである。ところが、最近では、目新しい学習材・指導方法といった面ばかり関心が集まり、本来の目標である「古典を読む力を養う」という点に対する配慮が充分になされていない現状があるのでないだろうか。

さて、実際の指導という観点から古典を読む力を

古典の原文を

- (1) 音読を通して味わい、
- (2) 辞書や注釈などを活用しながら、
- (3) 正確に解釈する力

と定義してみたい。

この三つは、本来総合的なものとして養われるべき力である。しかし、現実には各学校の置かれている状況に応じて、到達すべき目標をどこに設定するのかという点については、差が出てこざるを得ないのが実状であろう。例えば、いわゆる進学校であれば、入試という現実がある以上、(3)をことさらに目指すことが要請されるだろうし、一方、いわゆる基礎学力充実校では、何らかの形で古典に触れさせ、親しませることを目指して、「正確に音読できる」ということを最低限の指導目標とするといったこともあり得るからである。

さて、それぞれの古典の原文を読む力の指導について簡単に触れる。

先ず、(1)「音読を通して味わい」であるが、これはすべての言語を学ぶ際の基本となる力である。昨今の音読ブームではないが、古典教育の分野でも音読の重要性はかねてから強調され続けてきた。「国語総合」の学習という面からいえば、古典独特のリズムを体得すること（身体で学習すること）は、そのままそのリズムを統御する文法を体得すること（身体で学習すること）につながる、それが文法を理論的に学習すること（頭で学習すること）の根本になるといった点が注目される。また、古典の表現の美しさに魅力を感じる生徒も多く、教材選択とからめながら、特に意識して育てたい重要な力といえる。

なお、歴史的仮名遣いの読み方の学習が関係することになるが、昔の発音が正確には確定できない以上、必要以上に公式的な読み方にこだわる必要はない。聞いて分かりやすいように読めばいいのであって、必要以上に生徒を萎縮させないように注意したい。また、それとは別に、当然のことながら語句を正確に読むこと（漢字学習）や、言葉の強弱・抑揚・速度といった点に関しても、「話すこと・聞くこと」との関連を視野に入れながら適切に指導すべきであろう。

次に、(2)「辞書や注釈などを活用しながら」であるが、これは現在の流行の言葉でいえば、古典分野における情報検索能力・情報活用能力の育成ということである。あるいは、「学び方」を学ぶ学習と言い換えてもいだろう。従来この部分の指導に関しては、暗記に重きを置く傾向があった。しかし、これからの「国語総合」では、暗記すべき知識を精選することと、その知識を活用しながら

的確に語句・文法の情報へアクセスするテクニクを養う、といった観点からの指導が課題となってくる。

例えば、原文をノートに書写して現代語訳するという学習法も、①歴史的仮名遣いに慣れる ②辞書を活用して語句の意味・用法を知る ③文法的知識を身につける ④自宅での古典学習の習慣をつける、といった点で効果的である。次に述べる(3)「正確に解釈する力」を到達目標とする学校では、導入されてしかるべき指導法の一つといえるだろう。しかし、最近の古語辞典は、例えば「にふだう(入道)」という古典の仮名遣いを知らずに「にゅうどう」と引いても、目的の「入道」にアクセスできる工夫がなされている。特に、電子辞書ではその傾向が顕著である。また、教科書のテキストも、特に「国語総合」の場合は、生徒の余計な負担を減らすべく、底本が仮名書きになっても、意味の取りやすい漢字に校訂した本文を載せている場合が多い。

このような状況を踏まえ、①調べて分かること ②調べるためには知っておかなければならないことを明確化し、①についてはその具体的な検索方法を繰り返し演習し、②についてはプリント学習などを通して、知識の定着を徹底させることが指導の中心となる。多義語や基本的な助詞・助動詞については、その語の基本的な語感・用法を、文脈の中でしっかりと理解させることが、この段階での目標となる。

最終的には、(3)「正確に解釈する力」が育成すべき目標となるが、この力については、ア「語学的理解の力」(語彙・文法・修辞など) イ「内容的理解の力」(構成・テーマ・思想・心情・批評・鑑賞など) ウ「歴史的理解の力」(文学史、古典常識など)といったカテゴリーで考えることが一般的である。

実際の授業では、易しいものから難しいものへと配列されたさまざまなジャンル・内容の教材作品を題材に、①歴史的仮名遣い ②辞書の活用法 ③基本的な語彙・語法 ④基本的な文法知識 ⑤基本的な修辭法 ⑥古典常識 といった事項を採り上げながら作品を読み進め、授業のまとめ段階で批評・鑑賞する、といった指導をスパイラル状に繰り返している。つまり、「語学的理解の力」と「歴史的理解の力」を段階的に養い、それを「内容的理解の力」にまとめ上げ、その「内容的理解の力」を、さらに高度な「語学的理解の力」「歴史的理解の力」を身につけさせることで、より深く正確なものへと育ててゆく、と考えるのが古典指導の骨格である。

このような指導法ながらも、従来は「語学的理解の力」の養成を重視する指導が「古典」の授業の一般的な姿であった。いわゆる「訓詁注釈型」の授業である。しかし、生徒が多様化し、授業時数も減る現状を踏まえると、「語学的理解の力」の養成に重点を置いてコツコツと暗記知識を積み重ねる指導法は、特に入門期の「国語総合」においては、多くの現場で効果が期待できない状況となっている。むしろ、基本的な作品のある程度多読をさせることによって、「内容的理解の力」と「歴史的理

解の力」の幅を広げながら、総合的に「原文を読む」力を養ってゆく、つまり、「語学的理解の力」を「内容的理解の力」に結実させるといった方向での指導ではなく、先ず「内容的理解の力」を養うことを中心に置き、その過程で「語学的理解の力」を養うことの重要性を強調して、続く「古典」「古典講読」といった科目の学習に結びつけるといった方向が重要になってきている。

そのためには、現代語訳の効果的な活用法を工夫し、そこに原文をどう結びつけるかといった観点から指導を計画することが求められる。具体的には、①現代語訳をいつ示すのか ②全体の訳なのか部分訳なのか ③どの訳を示すのか(新編全集か、作家の訳か、教員や生徒の訳か、マンガ訳か、英訳か、など) ④複数の訳を組み合わせる指導はどうか(解釈の比較など) ⑤関連教材の現代語訳はどうか ⑥鑑賞文などの活用はどうか といった視点での工夫がますます必要になってくるだろう。

「歴史的理解の力」については、従来十分に指導法が顧みられることがなかった。作品と関連させて便覧を活用したり、文学史の副読本を自習させたりといえった指導がなされている程度であろう。しかし、「内容的理解の力」を養う指導を前面に押し出し、それを積み重ねる中で総合的に「原文を読む」力を養うためには、背景知識の効果的・印象的な提示が必要となる。特に、現代と異なる古典世界の風俗の指導については、さまざまなビジュアル教材・資料を効果的に活用することで、授業に対する興味・関心を引き出すきっかけとなるよう工夫したい。

「語学的理解の力」については、既に述べたが、①調べれば分かることの調べ方を習熟させる ②調べるためには知っておかなければならないことを確実に身につけさせる といった指導が「国語総合」の場合は先ず基本となる。その上で、「語学的理解の力」がより深い読解・鑑賞に結びつく場面

を丁寧に扱うことによって、「語学的理解の力」の重要性を体験させるとともに、引き続き「古典」「古典講読」へと学習を進める生徒に対しては、知識をネットワーク化する方法（具体的には、文法の体系的指導など）を示すことが重要となる。

また、「語学的理解の力」とすると見落としがちだが、動作主を特定したり、文の係り受け構造を捉えるといった総合力を養う指導を心がけることも必要となる。そのための音読の重要性についても、改めて注意を払いたい。さらに、いわゆる進学校では、重要な多義語や基本的な助詞・助動詞に関する分析的な指導も、場合によっては要請されるだろう。しかし、その場合でも基本的な語感・用法の理解を前提にすべきであり、いたずらに細分化された知識の暗記を強いることのないよう配慮したい。

●この指導案について

この指導案のポイントは、

- 1 『古事記』を入門期に扱うことによって、古典の想像力豊かな世界に触れさせること。
- 2 現代語訳を活用することによって、言語的抵抗感なく鑑賞を深めること。
- 3 原文に立ち返ることによって、古典の文体的美しさに触れること。

の三点である。つまり、現代語訳を活用して「古典に親しむ態度」を養うことを第一の目標とするが、同時に「(1)音読を通して味わい」というレベルでの「原文を読む」力を養うことを目指している。また、アニメ的ともいえる幻想的なシチュエーションの背後に、現実への強烈な関心とその世界を知的に理解しようとする哲学があること、つまり、ヤマタノヲロチの話を「人類最古の哲学としての神話」(レヴィ・ストロース)としてを読み取ること、古典世界のつきない魅力を知的に伝えようとする意図もある。生徒の感性と知的興味に訴え、古典に親しむ態度を養う指導を、ある程度スピード感を持って目指したい。

なお、指導案作成にあたっては、

①具体的な発問例

②評価規準

に対しても工夫を試みた。特に、評価規準に関しては、具体的な行動目標(イラストを書く・現代語訳と原文を読む・自分で考える・暗誦する)＋具体的な評価判断の仕方(イラストを完成できる・内容が理解できる・考えを書いてまとめられる・歌を暗誦できる)という書き方をとり、指導目標との関連を明確にすることに努めた。

●古事記の教材性

(1)『古事記』という作品の教材性

『口語訳 古事記(完全版)』(文藝春秋、二〇〇二)の著者三浦佑之氏は、同書が受け入れられた背景を次のように分析している。長くなるが引用する。

「思ってもいないことでしたが、『口語訳 古事記(完全版)』(文藝春秋、二〇〇二)という本を出したところ、たくさんの方に読んでいただくことができました。そのせいでしょうか、なぜ今、古事記が読まれるのかと尋ねられることがしばしばありました。おそらく質問者の意図としては、近年の保守化傾向と重ねて、あるいはグローバル化する世界への違和感とつながって、今、古事記が読まれることの意味を考えたいという気持ちがあるのかも知れません。そしてたしかに、そうした読解も可能かも知れませんが、一方で、もつとすなおに、神話の楽しさに気づいてもらえたからではないかとわたしは思っています。」

古事記という作品に語られている神や人の考えや行動が、今ここに生きているわたしたちにとって共振できることが多いというのが魅力だったのではないのでしょうか。語られている内容は突拍子もない出来事が多いのですが、そこからは、この大地の上に生きた人びとの息づかいが聞こえてきそうな感じがします。それは、古事記に登場する神や人がいずれも個性的で、喜怒哀楽に満ちているからです。そのために、堅苦しい本かと思っていたのに、現代の小説やマンガを読むのとおなじように古事記も楽しめるじゃないか、と気づいてくださったのだと思います。」

(三浦佑之『古事記講義』文藝春秋、二〇〇三、7頁)

ここには、『古事記』の教材性が簡潔に述べられているといえよう。

さらに、今回の指導案では提案していないが、もともと『古事記』が同書で三浦氏の指摘するよう

に、口と耳による伝承の累積であるとすると、「話すこと・聞くこと」の指導との密接な連携を模索することも可能となるのである。

(2) 『古事記』の入門期教材としての教材性

入門期の教材としては、言語的な面から内容的な面からも、我々の生きていく時代に近い近世の諸作品を活用するのがよいという考え方や、破綻のない基本的な文法にもとづく安定した作品がよいといった考え方が主張されてきた。『古事記』はその点についていえば、現代からは最も遠く隔たった時代の作品であり、また、上代の（教育現場ではあまり一般的ではない）文法に則っているといった点から、入門期の作品としては扱いにくいとされてきたのが現状である。そのため、「国語総合」や「古典講読」では『古事記』を採り上げた教科書はないし、読むことに重点を置いた「古典」でも、いわゆる「難しめ」の教科書の一部にしか採り上げられていないのが現状である。

確かに、原文だけを用いた授業をする場合は、かなり言語的な抵抗があるといえよう。しかし、ここでは現代語訳を中心に据えた授業を考えているのである。現代語訳の使用を前提とすると、言語的な抵抗の問題は当然軽減されるし、いわゆる「昔話」とも考えられる『古事記』の一部の話は、生徒たちにとって子どもの時から親しんでいるものといえるのである。また、ストーリーが「現代の小説やマンガを読むのとおなじように」（三浦前掲書）楽しめことも、入門期向けといえるだろう。

さらに、内容を理解した上で、音読を中心にして原文に取り組むことを考えると、語りの文体を持つ『古事記』は、その独特な語り口の魅力を持っており、内容ともども生徒の感性に訴える教材性を備えていると考えられるのである。

●対象

東京都立K高等学校（いわゆる基礎学力充実校のレベル）

「国語総合」（4単位）選択者（在籍18名） 古典入門期の生徒

●生徒の実態

現任校は、東京都の高等学校改革の中で四年前に開設された新しいタイプの高等学校（チャレンジスクール）で、三部制単位制総合学科という特色を持っている。不登校などを経験した生徒を積極的に受け入れることを前提としているため、内申書や試験による選抜は行っておらず、面接と作文を中心にして入学者を決定している。（現在、在校生の約七割が不登校経験者）そのため、人間関係の構築や、自らの生活をコントロールすることを苦手とする生徒が多い。また、基本的な学力や学習習慣が身につけていない生徒がほとんどのため、いわゆる基礎学力充実校のレベルに相当するが、学習そのものに対する意欲は比較的高く、課題などは概してまじめに取り組む。

なお、前期に「説話」作品（「鳩と蟻のこと」「母子猿」「児の空寝」「養老の滝」）を8時間で扱っており、その際、歴史的仮名遣いの読み方に関する基本的な指導は終わっている。今回の授業までに時間が空いてしまったが、入門指導に続く指導となる。

●授業タイトル

神話の世界 「ヤマトノヲロチ」 神話の背景にあるもの

●教材

- ① 『口語訳 古事記 完全版』（三浦佑之、文藝春秋、二〇〇二）四九～五三頁
- ② 『口語訳 古事記 完全版』（三浦佑之、文藝春秋、二〇〇二）百三～百五頁
- ③ 「須佐之男命の大蛇退治」（教育出版「精選古典」）百四～百七頁

●教材観

前述したように、『古事記』は従来から二年次後半、または三年次に学ぶ作品として位置づけられてきた。その中で、最も多く教材化されているのは「倭建命」の話である。「スサノヲの大蛇退治」がそれに続き、他に「海幸山幸」、「沙本毘古と沙本毘売」、「高行くや（速総別王と女鳥王）」、「枯野の琴」といった個所が教材化されてきた。

この中で、英雄物語といえるのは倭建命の話とスサノヲの話であるが、英雄としての姿が最も印象

的に描かれるのは「倭建命」であろう。ただし、物語の基調が悲劇的な味わいがあり、あらすじを挿入しながらストーリーを追うとしても、入門期の生徒にとっては分量が多いといった点が問題となる。それに対して、「スサノヲの大蛇退治」の場合は、英雄が活躍する冒険譚であり、その場面だけを取り出せるまとまりがある（教科書ページにして、見開き4頁におさまる）。また、物語に象徴される内容を読み取るおもしろさや、ペルセウスIIアンドロメダ型といった英雄神話類型の話に発展させられる可能性を持つこと、『淮南子』『搜神記』にも類話があること、さらに、「八雲立つ」の韻律的な表現の持つ抒情性に触れられる点なども兼ね備えており、教材としてさらに検討が深められるべきものといえよう。

●指導目標

- (1) 古文に親しむ態度を養う。
- (2) 「ヤマタノヲロチ」の話を理解する。
- (3) 神話の持つ意味について理解し、古典の奥深さを学ぶ。
- (4) 音読・暗誦により、古典の文体に触れる。

●時数 4時間（2時間連続×2回、1授業時間は45分）

- 【導入】 2時間
- 【展開1】 2時間
- 【展開2】 2時間（本時）

●指導過程

時	重点目標	学習活動	指導上の留意点・板書例
1	【導入】 1 神話の特質を理解する	(漢字演習) ① 「コノハナノサクヤビメ」の現代語訳 代語訳プリントを範読する。 ② 指名音読する。 ③ 話の内容を簡単に確認する。 ④ この神話が表していることは何か、考える。 ⑤ 神話の特質をまとめる。 ⑥ 「古事記」について紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ・『口語訳古事記 完全版』103～105頁 ・登場人物（神）やあらすじについて、発問しながら確認してゆく。 ・この神話は、人間の寿命の起源について語っている。 ・神話＝自然の秩序や人生の意味などについての哲学的思考。 ・便覧などを活用する。
2	【展開1】 1 ヤマタノヲロチの話を読む。 2 ヤマタノヲロチの姿をイラストで表現する。	① 「ヤマタノヲロチ」の現代語訳プリントを範読する。 ② 指名音読する。 ③ 話の内容を確認する。 ④ ヤマタノヲロチの姿が描かれている部分を確認する。 ⑤ ヤマタノヲロチの姿をイラストで表現する。	<ul style="list-style-type: none"> ・『口語訳古事記 完全版』49～53頁 ・登場人物（神）や、大蛇退治の経緯について発問しながら確認してゆく。 ・自由に描かせる。 ・回収してプリントし、次回の授業時に提示する旨伝える（ペンネーム可）。
3	【展開2】 1 ヤマタノヲロチの話の内容を理解する。 2 ヤマタノヲロチの大きさがどう	(漢字演習) ① 前時に学習したことを復習する ② 現代語訳プリントを音読する。 ③ イラストプリントを配布し、講評する。 ④ ヤマタノヲロチの大きさがどう	<ul style="list-style-type: none"> ・特に、神話の特質について思い出させる。 ・講評にあたっては、親しむ態度を養う観点からよい点を積極的に採り上げる。ただし、恐怖の対象であることは認識させる。

<p>ロチの話を 批評・鑑賞 する。</p>	<p>描かれているか、注意を喚起す る。 ⑤この神話が表していることを考 える。 ⑥自分の考えを三十〜五十字程度 にまとめる。</p>	<p>・ヤマトノヲロチの表しているものを考える 際、関連づける。 ・登場人物（神）の名前や、ヤマトノヲロチ の形象に注目させる。 ・回収してプリントし、次回の授業時に配布 する旨伝える（ペンネーム可）。</p>
<p>4 【まとめ】 1 ヤマトノヲ ロチの話を 原文で読み 味わう 2 「八雲立つ」 の歌を暗誦 する</p>	<p>①原文のプリントを配布する。 ②歴史的仮名遣いについて簡単に 復習する。 ③範読する。 ④音読・指名音読する。 ⑤「八雲立つ」の歌を鑑賞する。 ⑥全員で「八雲立つ」の歌を暗誦 する。 ⑦自己評価する。</p>	<p>・教育出版「精選古典」¹⁰⁴〜¹⁰⁷頁 ・「ぬ」「糸」の読み方、「追はえて」の「は」 などについて確認する。 ・読点ごとに区切って次々に読ませる。短い ので不得意でも取り組みやすく、かつ、緊 張感が持続する。</p>

●具体的な展開例

△導入1V神話に関する理解を深める

1 「コノハナノサクヤビメ」の現代語訳プリントを範読する。

*三浦訳古事記の文体に慣れさせる。

*難しい語について、読みや意味を確認する。

2 音読する。

3 話の内容を簡単に確認する。

発問例 登場人物（神）を挙げよ。

*アマツヒコヒコホノニニギ、オホヤマツミ、コノハナノサクヤビメ（カムアタツヒメ）、イハナガヒメ

発問例 ヒコホノニニギに結婚を申し込まれたコノハナノサクヤビメはどうしたか。（どこに書か
れているか）

*父が決めることだと伝えた。

発問例 オホヤマツミはどうしたか。（どこに書かれているか）

*さまざまな結納品とともに、姉のイハナガヒメも添えて嫁がせた。

発問例 ヒコホノニニギはどうしたか。（どこに書かれているか）

*姉を親元に送り返してしまい、妹とのみ契りを交わした。

発問例 イハナガヒメを送り返されたオホヤマツミはどうしたか。（どこに書かれているか）

*天つ神の御子の命は短くなるだろうと呪いの言葉を送った。

4 この神話が表していることは何か考える。

*人間の寿命の短さ、寿命（死）の起源。

5 神話について解説する。

△板書例

●神話||自然の秩序や人生の意味などについての深い哲学のはじまり。

△導入2V『古事記』に関する理解を深める

6 『古事記』について紹介する。

△板書例

『古事記』

●成立 七二二年（奈良時代）

稗田阿礼が暗誦していた帝紀（天皇の系譜など）と旧辞（伝説や歌謡など）を、太安万侶が文字で記録したものを、

●ジャンル 歴史書

●皇室の由来を天地創造のはじめから跡づけることで、支配の正当性を述べている。

●諸氏族に伝わる伝承や歌謡を集めてあり、古代の人々の生活感情や考え方がうかがえる。

*入門期なので、例えば日本書紀との比較をするなどといった扱いは必要はないが、古代の伝承が伝えられている点を理解させる。

*「皇室の由来を」以下の内容については、適宜扱い方をその場で判断する。

△展開1V話の内容を理解し、ヤマタノヲロチのイメージを広げる

1 ヤマタノヲロチの現代語訳プリントを範読する。

2 指名して音読する。

*難しい語について、読みや意味を確認する。

3 話の内容を簡単に確認する。

発問例 出雲の国は現在の何県か。

*島根県。

発問例 登場人物（神）を挙げてみよ。

*スサノヲ、アシナヅチ、テナヅチ、クシナダヒメ、ヤマタノヲロチ

発問例 出合いのきっかけは何か。

*箸が川上から流れてくること。

発問例 なぜ足名椎と手名椎は泣いているのか。（どこに書かれているか）

*毎年娘をヤマタノヲロチに食べられてしまい、今年も間もなくクシナダヒメが食べられてしま
いそうだから。

発問例 ヤマタノヲロチはどのように描写されているか。（どこに書かれているか）

*「その目はアカカガチのごとくに血を垂らしております」

発問例 ヤマタノヲロチの話を聞いたスサノヲはどのような提案をしたか、また、その提案を聞いた足名椎はどうしたか。（どこに書かれているか）

*ヤマタノヲロチを倒すかわりに娘がほしい。スサノヲの身分を確かめた上で承諾した。

発問例 櫛名田比売を得たスサノヲは、比売をどうしたか。（どこに書かれているか）

*美しい櫛に変えて、自らの髪に刺した。

発問例 スサノヲはどうしろと指示したか、また、それは後にどうする予定だったからか。

*垣根を巡らし、その八つの入口に、それぞれ強く醸した酒を入れた酒船を置いて待て。ヤマ
タノヲロチを酔わせて抵抗できなくしてから切り刻もうとした。

発問例 スサノヲはヤマタノヲロチから何を手に入れたか。（どこに書かれているか）

*ツムガリの刀。

発問例 宮をつくって、どうするつもりなのか。

*クシナダヒメと結婚する。

発問例 なぜ「須賀」という地名がついたのか。

*スサノヲがその地に至った時に、清々しい気持ちになったから。

4 ヤマタノヲロチの姿が描かれている部分を指摘する。

5 ヤマタノヲロチの姿をイラストで表現する。

*文章の内容を絵面化することがポイントであり、絵の巧拙は問わないことを伝える。

*回収してプリントし、次回の授業に提示する。

△展開2V話の内容を批評（鑑賞）する

1 前回の授業内容について（特に神話の特質について）、簡単に復習する。

2 現代語訳プリントを音読する。

3 ヤマタノヲロチのイラストプリントを配布し、簡単に講評する。

発問例 どの絵が本文と読み比べてよく描けていると思うか。

*古典の時代にヤマタノヲロチを絵画化したものは現存していない。出雲・石見地方で行われている「大蛇退治」をモチーフにした神楽が、唯一のヤマタノヲロチに関するビジュアル情報である。ただし、これも幕末程度までしかさかのぼれないようである。

*講評にあたっては、親しむ態度を養う観点からよい点を評価する。ただし、ここでのヤマタノヲロチは恐怖の対象になっているので、その点に関してはしっかりと認識させたい。

4 ヤマタノヲロチの大きさがどれくらいなのか、考える。

発問例 「谷を八つ、山の尾根を八つ」とあるが、ヤマタノヲロチを退治する場面では、ヤマタノヲロチはどれくらい大きさと想像されるか。

*絵画化のヒントとした部分には、「谷を八つ、山の尾根を八つも渡るほど大きく」とあるが、酒船から酒を飲む場面や切り刻まれる場面からは、当然のことながらそれほど大きさは想像されない。そこには、普段は静かな流れの川が、増水などによって大きく印象を変えることが形象されているのかも知れないが、ここでは合理的な説明を考えるのではなく、そのように描かれていることを確認し、後にヤマタノヲロチが表しているものを考察する際に結びつけるようにする。

5 クシナダヒメが「奇稲田姫」とも表記され、「稲を育てる田を象徴する女神」と読み取れることを紹介する。

*『古事記』は「櫛名田比売」、『日本書紀』は「奇稲田姫」とする。

6 アシナヅチ・テナヅチという名は、どのように読み取れるか考える。

発問例 足・手とあり、「チ」が二人が神であることを示す言葉。「チ」は、イカズチ(雷)の「チ」、イノチ(命)の「チ」で霊的な威力を示す。だとすると、この二人の名はどんな意味を表していると思像されるか。

*「足を撫で、手を撫でて娘を育てる者」という意か(三浦佑之『口語訳古事記(完全版)』)

*「アシナヅチ・テナヅチ」に関しては、「ナ」は「イナ(稲)」で、「アサイナ↓アシナ」の「アサ」は「オソ(遅)」の転、「テイナ↓テナ」の「テ」は「ト(疾)」の転であるから、それぞれ「晩生の稲の精霊・早生の稲の精霊」の意とする説もある。(新潮古典集成『古事記』西宮一民、一九七九)

7 ヤマタノヲロチが表しているものを考える。

発問例 ヤマタノヲロチの姿からは、どのようなことがイメージされるか。

*「八つの頭と尾はいくつにも分かれた河口や支流のさまを、体に生えたコケや木は両岸のさまを、谷や尾根を渡る姿は蛇行する揖斐川の流れを、爛れ流れる血は崩れ落ちた両岸の山肌を、まを、赤い目はその妖怪性を強調する」(三浦前掲書)

*土石流や溶岩流のような自然の猛威のイメージもあるだろう。

発問例 年ごとに来て娘(田を象徴する女神)を食べるというヤマタノヲロチは、いったい何を表していると思うか。

8 スサノヲが表しているものを考える。

発問例 スサノヲはヤマタノヲロチをどのように退治したか。

*力ではなく、知恵で退治した。

*具体的な方法の解答が出たら、抽象化してまとめよう。

発問例 ここから、スサノヲはどんな神であるといえるか。

*巨大なヤマタノヲロチに立ち向かう勇氣と、知略を備えた神。

*クシナダヒメとの結婚も含め「愛と知と勇の三徳兼備の英雄」(新潮集成)と評価される。

9 この神話が表しているものを考える。

発問例 スサノヲがヤマタノヲロチを打ち負かしたことは、どのようなことを表していると考えられるか、それぞれノートに三十〜五十程度でまとめよう。

*自然の猛威から稲田を守りえた人間の知恵の勝利。

△板書例▽

【この神話が表現していること】

●クシナダヒメ（↓稲田を表す）

「奇・稲田・姫」⇨稲田を象徴する女神
神祕的 女神

●アシナツチ・テナツチ（↓稲田を育てる人々を表す）

「足（手）・撫つ・ち」⇨娘の足（手）を撫で育てる神

●ヤマタノヲロチ（↓イメージ）蛇行して流れる川の姿を表す）

「八又の・尾・ろ・ち」⇨八つに別れた尾の力
（娘を） 霊的な力



◎ヤマタノヲロチがクシナダヒメを食べる⇨川の氾濫

◎ヤマタノヲロチを退治する⇨川の氾濫を制御する *智恵で退治する

△まとめ▽原文を読み味わう

1 原文のプリントを配布する。

2 歴史的仮名遣いの読み方について、簡単に復習する。

発問例 「汝が泣くゆゑは、何ぞ」の「ゑ」は、何と読むか。

発問例 「鳥髪といふ地」「思ひて」「問ひたまひしく」「なむち」は、それぞれ何と読むか。

*細かい読み方の原則にはこだわらない。

3 範読する。

4 音読・指名音読する。

*読点ごとに区切って次々に読ませる。短いので不得意でも取り組みやすく、緊張感も持続する。

5 「八雲立つ」の歌の内容を確認する。

発問例 「宮」（神の住む家）は何のために作るのか。

*クシナダヒメと暮らすため。

発問例 「須賀といふ地に至りました」とあるが、スサノヲが須賀に着いた時、その地は「須賀」と呼ばれていたか。

*地名起源譚であることの確認。

発問例 雲がわき立ちのぼるのは縁起がいいことか、悪いことか。

発問例 「八雲立つ」の歌はどのような気持ちから歌われた歌か、現代語訳プリントから指摘せよ。

*「喜びの歌」

発問例 この歌は主として何について（何を題材にして）歌っているか。

*「八重垣」

発問例 「八重垣」が素晴らしいと歌うことで、結局何が素晴らしいといたいのか。

*八重垣に囲まれた宮と、そこでクシナダヒメと生活すること。

6 「八雲立つ」の歌を暗誦する。

7 授業の感想をまとめ、自己評価する。

●評価規準

(1) 積極的に各作業に取り組み、他の意見を参照しながら読みを深めている。(関心・意欲・態度)

◇取り組み状況・授業態度・提出された感想・自己評価表など。

(2) 現代語訳を参照して、イラストを完成することができる。また、イラストにヤマタノヲロチの

恐ろしさが表現できている。(知識・理解、読む能力)

◇取り組み状況・提出されたイラスト・自己評価表など。

(3) 現代語訳や原文を「読むこと」に積極的に取り組み、内容が理解できる。(知識・理解、読む能力)

◇発言・ノート・自己評価表など。

(4) ヤマタノヲロチの話が象徴するものについて考え、それを「書いて」まとめられる。(知識・理解、読む能力、書く能力)

◇取り組み状況・提出されたまとめ、自己評価表など。

(5) 積極的に「暗誦」に取り組み、「八雲立つ」の歌が暗誦できる。(知識・理解、話す・聞く能力)

◇取り組み状況・態度・暗誦の実際・自己評価表など。

●その他

ヤマタノヲロチの話に関しては、従来からその背景に込められたストーリーを読み取る指導がなされてきた。ただ、原文を扱うことに重きが置かれているために、原文自体の難しさもあつて、なかなか作品を題材にして考えを深めるといった部分に時間をかけることは難しかった。例えば、文法的な題材でいえば、

①「故」「しかくして」といった接続詞

②奈良時代の助動詞「ゆ」「す」の用法

③過去の助動詞「き」の用法

④ク語法

といった内容の学習が必要と考えられる。しかし、入門期で扱うとするなら、①②④については、語彙の指導として簡潔に扱うことが可能だし、③については、特にここで採り上げる必要はないだろう。もちろん、話を経験過去の助動詞「き」を用いて語ることにについては、助動詞「き」の学習とからめながら鑑賞を深めさせることも可能であるが、それは入門期ではなく、さらに進んだ段階の学習で『古事記』を扱う際に構想されればよいのである。

現代語訳を活用するにあたっては、その前提として、

①どの程度の比重(原文・現代語訳)で用いるのか

②現代語訳をいつ示すのか

③全体の訳なのか部分訳なのか

④どの訳を示すのか(学者の訳、作家の訳、教員や生徒の訳、マンガ訳、英訳、など)

⑤複数の訳を組み合わせる指導はどうか(解釈の比較など)

⑥関連教材の現代語訳はどうか

⑦鑑賞文などの活用はどうか

⑧年間、どのくらいの時間を配当するのか

⑨どの教材がふさわしいのか

といったことを検討することが必要となる。ここでは、現任校の実態や、「古典に親しむ」という指導目標から、内容理解の部分については、授業の最初から全面的に現代語訳を活用した。なお、最新の研究成果を盛り込み、古老が語る文体を採用した三浦訳を用いたが、多少難しめといった印象がないでもない。

この実践は「中堅校指導充実」というテーマである。いわゆる「中堅校」はその想定される範囲も広く、受験対策が必要とされる学校もあるだろう。その場合、『古事記』という作品が、少ない授業時間内で扱うのに適当な作品といえるのかどうか、また、文法指導をどう位置づけるのかといった課題がさらに考えられる。ただ、神話の背後にある哲学に注目させることは、古典に対する興味を喚起するとともに、現代との結びつきを考察させる上では有効な方法となりうるので、入門期の教材として位置づけることや、現代文教材・小論文教材との連携なども視野に入れた教材化も模索したい。(なお、使う現代語訳の種類や、教材化する範囲を工夫することで、中学校での実践も可能と考える。)

今回は、神話の背後にあるものを読み取ることに主眼を置き、その他の部分についてはほとんど触れずにいるが、さまざまに読みが広がる要素を備えた教材だけに、さらに教材研究・指導法の研究を深めたい。また、現代語訳の具体的活用法についても、前掲の①～⑨の視点を踏まえながら、さらに研究を深めたい。

(以上)

(資料)

○都立K高等学校の資料は、「まなび」の指導案に従って作成させたもの。
○都立H高等学校の資料は、授業の空き時間に二授業時間（二授業時間は45分）で三年生に対して行ったもの。なお、コノハナノサクヤビメの話を学んだ後、ヤマタノヲロチの話の初読で書かせたものが「当初」、内容を確認した後には書かせたものが「分析後」である。

ヤマタノヲロチの話が表していること

2003

(都立K高等学校)

- スサノヲのすごさ（困った人々を助けるヒーロー）
- 農業にかかわるお話！？とか。
 - ・ 稲田を育てている人々がヤマタノヲロチを退治する。
 - ・ 苦労とか（智恵を使って退治するから）していた。
 - ・ 神秘的なお話。
- 農家の人の稲に対する愛情みたいなもの。
- 雨とかで川が氾濫しちゃうから、ヤマタノヲロチが自分の力で水の力を止めようとした。
- 川が氾濫して稲田を荒らさないようにコントロールしている。
 - ・ 自然の力はすごくて、怖いものだという話。
 - ・ みんなに水の恐さというものを知ってもらおう話。
- 自然の力に智恵で立ち向かって、川の氾濫を止めた人（＝スサノヲに当たる人）が、神様に見えた。
 - ・ ……ダムみたいなものが初めて作られた、または、作られた時代の様子：かな？と思った。
 - 稲作を川の氾濫でダメにされていたのを、知恵を使って守る話。
 - 知恵を使って大切な稲田を守る。
 - 体力的にムリなら頭を使いなさい……ってことかな（苦しい！）
 - 自然災害も、知恵でなんとかなる。
 - ・ (人々の進化！？)
 - ・ 人々の知恵の素晴らしさ。
 - 力でかなわないものには知恵を使ってたかう、かな？
 - ・ 力まかせではよくない。
 - 川がたとえになっっていますので、きっと川のように人間も時には氾濫（暴言をはいてしまったり）を起こしてしまい、そのやるせない思いを周りのものにぶつけてしまうといったことが表現されているのではないかなと思います。また、その暴動をどうにかして止めようとして、必死にそのための手立てを考え、それを実行する人がいるということも読み取れるような気がします。
- 川（自然）の氾濫に、人間が生きていくために知恵を使ってどうにかしようと頑張るお話。

ヤマタノヲロチの話が表していること

2005

(都立H高等学校)

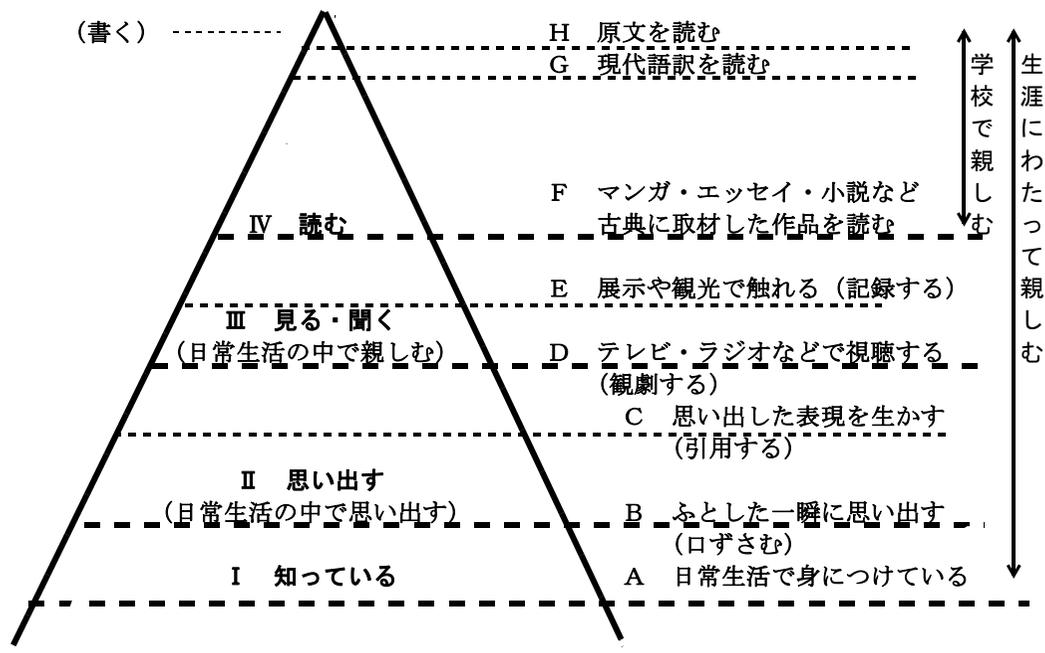
(当初)

- 草薙の大刀の起源と須賀という地名の起源。(多数)
- 貴重なものや素晴らしいものは、困難を乗り越えないと手に入れられない。(多数)
- 危険をかえりみない勇氣と知恵が幸せを手に入れるカギ。(多数)
- 正義は勝つ。
- 見かけにだまされないと知恵を使えば、どんなに強い相手に対しても勝つことができる。
- 世の中が平和になった起源。
- 地方成立の歴史。治水の歴史。
- 天皇が民を支配する根拠づけ。天皇の知恵を力を表している。
- 自然は驚異ではあるが、人の文化には抑圧されてしまうということ。
- 人間の知恵は、何かを得るための手助けになる。
- 策をもってすれば、手強い相手にも勝つ機会はある。
- 人間の知恵というものが、自然を上回る。
- 酒にはよいことがない。
- 自然界にも神の力が及ぶことで、ヲロチのような超常的存在が減ぼされ、人間とそのような神が生きる時代が終わり、人間の歴史がはじまるということ。
- ヤマタノヲロチという神話における哲学は、資本主義に似たものを持っている。すなわち、娘をくれないければヲロチを退治しないということだ。
- 人は得たいの知れないモノに出会ったとき、それを過剰に誇張するが、その実体を知った途端、自らが恣意的に創り上げた空想との差異に驚き呆れる生き物である。

(分析後)

- 自然に勝つ文明の誕生。
- 農業が盛んになり、米がたくさんとれるようになった。
- 洪水を防ぐ土地整備をして、中から砂金か何か、高価なものが出てきた。
- 洪水から農作物を守る方法(堤防を作る方法)が発見されたということ。
- 自然をも知略で支配できる。
- 農民たちが洪水を克服したこと。(だが、それで良いのか。古代エジプト人は、ナイル川の氾濫により肥沃な三日月地帯を形成して繁栄した。洪水を防ぐのではなく、利用すべきである。)
- スサノオは、洪水を知恵・工夫によって克服し、稲田を守る存在として描かれている。
- 人間は、洪水などの自然現象をコントロールすることができる。
- 力だけでなく、人には知恵が必要であるということ。
- 知恵(人間)が力(自然)に打ち勝った。
- 実際の洪水もうまく工夫すれば静めることができるということ。(堤防作りとか)
- 当時の農民は洪水を恐れていたが、スサノヲの知恵で自衛できるようになったということ。
- 人間は知恵によって自然現象(洪水)にもまさる対応ができるようになった。
- 人間の知恵は、何かを得る手助けになる。
- 田畑を荒らしてしまう洪水を止める。
- 毎年の洪水に悩む農民たちを救う話。
- 洪水などの農民を悩ませる災害から、知恵を使って工夫することで、逃れられるようになった。
- ほしいものを手に入れるためには、それ相応の努力をしなければならぬ。
- 自然の驚異も人間の文化によって押さえられる。稲田にとって大敵である洪水とどう向き合うか。治水の大切さ。
- 農民は苦勞・工夫を重ねて稲作を行っているのだということ。
- 洪水によって農民が大切に育てた稲田が破壊されないように、川のまわりを整備した。
- 堤防などを作るなど、知恵を使って洪水を防げるようになった。
- 洪水による水を利用した水田作りのはじまり。

■ 図1 「古典に親しむ態度」の概念図



■ 表1 概念図をもとにした「古典に親しむ態度」を養う指導の例

IV 読む段階	○現代語訳 (マンガなども含む) の活用 ○古典に取材した作品の活用 (読み比べなど)
III 見る・聞く段階	○行事との連携 (古典芸能鑑賞会、百人一首大会、校外学習など) ○古典関係の番組ビデオ、映画、CD-ROM、ホームページなど ○時事話題、スポーツ新聞の見出し、新聞の川柳欄など ○生徒自身に題材を探させる (長期休業中の課題など)
II 思い出す段階	○暗誦 (朗読、群読など)、名文句・決まり文句の暗記 ○現代文・漢文教材との連携、語彙指導など ○「その日の出来事」的連携 (例：12月14日＝赤穂浪士討ち入り)

■ 表2 これからの学習指導の方向

- 学習材 = 現代語訳の活用 (原文中心主義からの脱却)
 - 文法指導 = 「暗記」から「活用する力」の育成へ
 - 授業形態 = 表現活動、課題解決学習 (調べ学習) など、生徒の活動を中心に据えた授業
- ↓
- 従来行われてきたさまざまな指導 (上記「III 見る・聞く段階」「II 思い出す段階」) を、意識的に「古典に親しむ態度」を養う指導として位置づける。